

19. 近代的自我と文学

○近代的自我…西洋思想移入の中で、文学者に代表される当時の知識人が確立しようとした、内面的・主体的な自己意識。明治 20-30 年代のロマン主義運動として主に文学界で起こり、明治後半期には自然主義・反自然主義などが生まれた。大正デモクラシーの中で、哲学思想における人格主義・教養主義などが展開され、漱石の立場を引き継いだ白樺派の文学者たちも登場した

○ロマン主義…×「固定的な形式・規則」 ○「自由な感情や豊かな想像力」「自我・個性の尊重」

□北村透谷[1868-94]明治期の詩人・評論家。民権運動の挫折をへて文学を志す。『文学界』を創刊し、近

代的自我の覚醒を促すも、理想と現実の乖離に耐えられず、自殺

・透谷の考える "自由・幸福" …×「実世界」(現実の世界)の自由・幸福→功利主義

○「想世界」(内面的世界)の自由・幸福←(信仰と愛によって実現)

[著書]『内部生命論』(×肉体的な外部生命「実世界」 ○精神的な内部生命「想世界」)

□与謝野晶子[1878-1942]明治-昭和期の浪漫派の歌人。人間性の解放をはばむ封建的道德に挑戦

・君死にたまうこと勿れ…日露戦争に従軍した弟を想って詠んだ歌。反戦のメッセージ…?

□島崎藤村[1872-1943]明治-昭和期の代表的文学者。1893年、透谷とともに『文学界』創刊

[著書]『若菜集』(ロマン主義)→『破戒』(自然主義)

○自然主義…文学において、古い思想や行動に捉われず、日常の事実をありのままに描く立場

□田山花袋[1872-1930]私生活をありのままに描く [著書]『蒲団』『田舎教師』

□国木田独步[1871-1908]既成の道德や思想の束縛を捨てて、自己の感覚そのままに、直接天地や人生の事物事象に触れる [日記]『欺かざるの記』

○夏目漱石の思想…明治以降の日本の近代化のあり方を問う

□夏目漱石[1867-1916]明治期の代表的作家。イギリスへの留学以降、他人本位の自分の在り方に苦悩する。『吾輩は猫である』以降、多数の文学作品を書き上げ、49歳で人生を終える

・自己本位…伝統的社会関係から解放され、自我の内面的欲求に基づいて生きる事。自我の追求に真正面から向き合う事⇔他人本位

・個人主義…自己本位に根ざす個人主義。自分や他人の個性を倫理的に尊重した上でのもの
⇔エゴイズム(自己中心的主義)

・則天去私…晩年の考え。小さな自分を去って、普遍的な自然の命ずるままに自分をまかせる。運命に甘んじ、静かに一切を受け入れる態度

[著書]『現代日本の開化』(内発的開化; 西洋文明・自然発生的な文明の発展 外発的開化; 日本・外国文明の圧力による、やむを得ず開始された文明開化⇒自己を失って、虚無感や不安を感じる)

『私の個人主義』(彼の思想の中で、自己本位に目覚めるまでの経緯を語る。)『こゝろ』『明暗』(遺作)

○森鷗外の思想…当時の自然主義文学を批判。ロマン主義文学に傾倒

□森鷗外[1862-1922]明治・大正期の代表的作家。軍医。内面的自我の欲求や自己感情と社会的責務の間の対立を描く。

・諦念(レジグナチオン; resignation)…個人と社会の葛藤の中で、あくまで自己を貫くのではなく、自己の置かれた立場を見つめ、受け入れることによって心の安定を得る

[著書]『舞姫』(主人公太田豊太郎がベルリンの踊り子エリスと恋仲となるも、帰国せねばならなくなり、エリスは発狂。国家や社会・家族などの周囲から期待される役割と近代的自我の対立・葛藤が題材)『阿部一族』『高瀬舟』

○白樺派…

□武者小路実篤[1885-1976]大正・昭和期の文学者。白樺派の中心人物。理想主義・人道主義に生き、理想社会をめざした「新しき村」(労働&芸術の共同体)を建設した

センター問題に挑戦! No.19 (2011年本試) [やゝ易]

ロマン(浪漫)主義の主張の説明として最も適当な人物を、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 旧来の道徳に真に従うために、自然な感情を尊重し、感情の中に含まれる道徳への志向に基づく自我を確立すべきだと主張した。
- ② 伝統的な権威から離脱し、新たな生活や社会制度のあり方を築くことができる理想的な主体としての自我を確立すべきだと主張した。
- ③ 伝統的な道徳に囚われず、現実をありのままに直視することで、自己の自然なありかたに語とづいた自我を確立すべきだと主張した。
- ④ 旧来の社会で必要とされてきた価値観の束縛から脱し、自然な感情や情熱を肯定することを通じて、自我を確立すべきだと主張した。

[No.18の答 ③ ①×女性史研究家 ②×歌人 ④×明治初期の女性運動家]